

洛中洛外図の中の京都 都市図としての視点から

Kyoto Depicted in Scenes In and Around Kyoto: from the Viewpoint of Cityscape Paintings
SUKIGARA Toshio

鋤柄俊夫

二つの洛中洛外図

「歴博甲本」と「上杉本」の洛中洛外図屏風は、戦国時代の京都の姿を描いた最も有名な絵画資料である。小島道裕氏の研究によれば、その制作年代は前者が一五二五年で後者が一五六五年だとされ、いずれもそれに近い時期の京都の姿を表現していると考えられている。そのため、この二つの著名な洛中洛外図は、基本的な構図や内容に類似するところが多く、両者の関係については、先に完成していた「歴博甲本」を原型とした地理的な整合性や四季性などの特徴に基づき、系統的な視点で説明されることが多い。

しかし、この類似した二つの洛中洛外図にも、東西通の傾きや公方邸の位置、描かれている寺社および、それぞれの洛中洛外図の主人公と考えられる人々など、異なっている点もみられる。これまで、このような二つの洛中洛外図の類似点と相違点については、主に美術史の視点から研究がすすめられてきた。それは、この二つの洛中洛外図が、制作者の

意図によって描かれた創作性の高い絵画資料であることによるもので、絵画資料を対象とした研究として最も適切なすすめ方と言える。

また、この二つの洛中洛外図によって表現しようとしたものが何であったかについても、林屋辰三郎氏以来研究がすすめられ〔林屋一八四〕、水藤真〔水藤一九九四〕・黒田絃一郎〔黒田絃一九八七a・一九八七b・一九九六〕・今谷明〔今谷一九八八〕・瀬田勝哉〔瀬田一九九四〕・黒田日出男〔黒田一九九六〕・小島道裕〔小島二〇〇九〕の各氏による、精緻で意欲的な研究が発表されてきたことは周知の通りである。

そんな中、とくに近年は京都市内の発掘調査情報の蓄積と整理がすすみ、調査で見つかった遺跡を洛中洛外図の描写と対比して考える研究もおこなわれてきている。その点でこの二つの洛中洛外図には、これまでの美術史的な見方に加えて、都市図としての見方も慎重に検討されはじめる環境が整ってきたと言える。

ただし発掘調査で得られた情報と洛中洛外図の対比は個別におこなわれ、都市全体としてとらえられたことは無い。また洛中洛外図制作の意

図1 歴博甲本(ゴシック)と上杉本(明朝)の上京と「洛中絵図」の街路(小文字は現代名称)

図2 歴博甲本に描かれた下京

図3 上杉本に描かれた下京

図を探る読み解き研究は、基本的に上京を舞台とし、さらに「上杉本」か「歴博甲本」かのいずれかである場合が多い。確かに上京と下京を比べた場合、登場人物や出来事の場面の物語性は、上京が強いことは明らかである(図1 歴博甲本と上杉本に描かれた上京)。しかし二つの洛中洛外図を比べた場合、建物や屋敷については、上京より下京の違いが目立つことも明らかである(図2 歴博甲本に描かれた洛中)(図3 上杉本に描かれた洛中)。このような二つの洛中洛外図の相違は何に起因し、何を意味しているのだろうか。

水藤真氏が言うように、本来都市景観はそれ自体何の変哲もないもので、それ自体では美でもないのにもかかわらず、政治も含めたそれ以外の多くの要素とともに、それを完成した絵画とさせた原動力はなんだったのだろうか。

そこで小稿では、すでに別稿で検討した洛中洛外図と上京の空間構造をふまえ(鋤柄二〇〇八)、都市図の視点から、二つの洛中洛外図の違いが具体的な建造物として示されている下京に注目し、蓄積のすすむ遺跡情報によってその違いの背景を検討することで、一六世紀代の京都の姿を模索してみたいと考える。

洛中洛外図の中の遺跡

(図4 左京の調査地点図)(以下は、今谷一九八八『洛中洛外図大観』、小島二〇〇九、『国史大辞典WEB』、『J K版日本歴史地名大系』、『図説上杉本洛中洛外図を見る』および各報告書を参考にした)

(1) 妙覚寺(歴博甲本・上杉本) 二条南室町西

妙覚寺は、妙顕寺大覚の弟子である日実が、永和四年(一一三七八)に弟の日成と共に豪商小野妙覚の支援を受け四条大宮で開いた。その後文

明一五年(一一四八三)に、足利義尚によって二条南室町西の二条衣棚に移され、天文五年(一一五三六)の天文法華の乱で堺に逃れたが、同一七年(一一五四八)までには京へ戻り、二条衣棚の旧地に再建されたと考えられている。なお織田信長は、元龜三年(一一五七二)の上洛に際して当寺を宿舎とし、『多聞院日記』によれば、天正一〇年(一一五八二)に本能寺の変で討たれた時、当寺に信長の子信忠がいたため明智勢に攻められ、一部の塔頭が焼上したという。

「上杉本」には、入母屋造の本堂と流造檜皮葺の鎮守社、鐘楼、板葺の門などが描かれているが、今谷明氏は永禄元年(一一五五八)に足利義輝が妙覚寺を仮御所とした時には、少なくとも二カ所の武家御殿があったため、「上杉本」の表現は、それ以前の妙覚寺の姿を描いたものとしている。また『洛中洛外図大観』によれば、「上杉本」は西方の土居と堀および南西隅の櫓風の建物に要害化をうかがうことができ、「歴博甲本」も、東洞院川を利用した堀と西方部の土居に要害化が見え、同寺の西南には町木戸も見えたとする。

妙覚寺の東隣接地にあたる二条南室町東は左京三条三坊九町にあたり、平安時代後期の東半部には、白河法皇と待賢門院藤原璋子の臨時御所となった二条烏丸殿があった。室町時代の発掘調査結果によれば(調査地8)、南北軸で推定幅五mの堀状遺構SX八が見つかっている。埋土から主に桃山時代の陶磁器が出土しており、一六世紀中頃に成立した町の地割が邸宅の東限にあたりと考えられている。また鑄造に関係する遺物も出土し、この地区が一六世紀中頃以降に、商工業地区として整備されたことがうかがわれる。

(2) 二条殿(歴博甲本・上杉本) 押小路南室町東(調査地9~11)

二条殿は、南北朝時代の政治家で歌人でもあり、また足利義満の後見役にもなった二条良基の邸宅で、『太平記』には「押小路烏丸二、二条

中納言良基卿ノ宿所」と登場する。

『洛中洛外図大観』によれば、「上杉本」の御殿は檜皮葺で寝殿の形式を残しており、西北に描かれた有名な竜躍池は、「水石を配した広大な園地を鑑賞する公家や囲碁に興じる若者の姿がみえる」とする。なお、この時期の当主は二条尹房と晴良が該当するが、尹房は天文五年（一五三六）に周防に下り天文二〇年（一五五一）に死んでいるのに対し、晴良は天文一七年（一五四八）と永禄二年（一五六八）に関白になっ

ていたため、この時の当主は晴良とする。一方「歴博甲本」は二条尹房が当主で、邸の南に大きく池庭が描かれ、二棟の入母屋造の建物が棟を直交して描かれている。なお小島道裕氏は、このような「上杉本」の二条邸を、「花の御所」と「源氏物語屏風」との共通性から「作られた景観」としている。

左京三条三坊十町にあたるこの町は、鎌倉時代には後鳥羽上皇の御所のひとつである押小路殿であったが、承久の乱後は藤原道家を経て、二条家の邸宅として続いた。このうち室町時代の発掘調査結果によれば、二〇〇二年の調査で、鎌倉時代前期に造営され、室町時代後期まで利用

図4 左京の調査地点図

表 左京調査地点リスト

された庭園と建物が見つかっている。基本的に建物は調査区の東に位置し、西側が下降して池となっている。このうち室町時代後期の庭園は、小石と白砂で州濱をつくり、庭園の傾斜が変わるところに景石をおいて

いる。洛中洛外図に描かれた二条殿も東に建物、西に池を配置しており対応する(図5 二条殿遺構変遷図)。

一方二〇一〇年の調査では、この町をほぼ東西に二分割する位置から、南北軸の堀が発見された。幅は三m以上、深さは一m以上で、一五世紀後半から一六世紀半ばに機能したものと考えられている。この堀の性格については、その規模が町組を囲う「構」に匹敵することから、文明年間以降の二条家は衰退し、邸宅も縮小していた可能性が指摘されている。なお、この堀が埋められた一六世紀後半以降、この地には織田信長の二条御新造が造営されるが、その面から浴室と考えられる遺構が見つかっている。

(3) 妙顕寺(上杉本) 二条南西洞院東

妙顕寺は、日像が永仁二年(一二九四)に京都で布教を開始した際に拠点として建立した寺で、綾小路大宮辺りにあったとされる。元亨元年(一二三二)に今小路に移るが、暦応四年(一二三三)には四条櫛笥西頼地一町を賜り移転し、さらに明徳四年(一二三三)には足利義満から「押小路以南、姉小路以北、堀河以西、猪熊以東」の地を与えられ、寺号を妙本寺と改めた。応永一八年(一四一一)には足利義持の祈願寺とされ、永正(大永)一五〇四(一五二八)頃に寺号を妙顕寺にし、洛中洛外図に描かれる二条西洞院に移ったのは、足利義植に命じ

図5 二条殿遺構変遷図(京都市埋蔵文化財研究所 2002-07)

られた永正一八年（一五二二）である。天文法華の乱で堺の妙法寺に逃れるが、帰洛の後、法華寺と改称して二条西洞院に再建し、天正三年（一五七五）に「二条以南、三条坊門以北、油小路と西洞院間東西一町南北二町」の敷地を安堵されている。

『洛中洛外図大観』によれば、本堂は南面し、屋根は寄棟造の本瓦葺である。表門は東面し板葺の棟門で、鎮守社と坊社が二棟見える。また妙覚寺と同様に堀を巡らせ要塞化した姿をみせるとする。

妙顕寺の西の隣接地にあたる左京三条二坊十町の堀河院跡地点で（調査地7）、発掘調査がおこなわれている。洛中洛外図の時代にあたる

図6 左京三条二坊十町遺構配置図（京都市埋蔵文化財研究所 2002-17）

一六世紀中頃の遺構や遺物はあまり明確ではないが、一六世紀前半にあたる東西方向の溝一〇〇が見つかり、当町を区分する敷地境界と考えられている。一方、秀吉の妙顕寺城の時代には、調査区の北西端から、堀川の水運を利用する目的で舟人と推定される落込九二五が見つかっている（図6 左京三条二坊十町遺構配置図）。深さが一・四mで東西幅が一・五m以上ある堀状の遺構で、底にシルトが堆積しており、調査区外に開かれた状態で機能していたと考えられている。

（4）曇華院（歴博甲本・上杉本）三条北東洞院東（調査地16）

曇華院は、足利義詮の側室で義満の母となる良子の母智泉尼（聖通）が、高倉宮跡に創建した瑞雲山通玄寺の東菴に由来し、後に通玄寺も曇華院と呼ばれるようになったとされる。草創の時期は明確でないが、すぐ北の等持寺にいた義堂周信の『空華日用工夫略集』の康暦二年（一三八〇）には通玄寺仏殿の起工式の記事があり、少なくとも一四世紀代にさかのぼることがわかる。その後の曇華院は、足利義満の禅利等位により尼五山のひとつとされ、『蔭涼軒日録』の寛正六年（一四六五）四月二十八日条によれば、南に総門にあたる南門が建ち、その北に山門、仏殿、方丈と一直線に連なる伽藍が推定されている。

今谷氏によれば、応仁元年に焼けた当寺の再建は文明一七年（一四八五）に幕府の援助でおこなわれたが、足利義植の妹がいたため（明応二年（一四九三）に細川政元の政変で破壊され、さらに大永七年（一五二七）にも大火に遭い、その再興は後奈良天皇皇女聖秀尼が入る直前の天文二二年（一五五三）とされるため、上杉本に描かれた曇華院は大火から復興途中の姿とする。

『洛中洛外図大観』によれば、「上杉本」では東寄りの瓦屋根が堂で、入母屋屋根が僧房とされ、「歴博甲本」では、西に棟門をおき、入母屋造檜皮葺屋根の建物が主屋で、その南には庭が配され、北にも入母屋造

板葺の建物が描かれているとする。

左京三条四坊四町にあたるこの町の発掘調査のうち、室町時代の状況をみれば、一九八一年の調査では三条大路の北端から二五m離れた位置で見つかった東西軸の溝五が一六世紀後半の時期で、曇華院の南築地の側溝と考えられているが（調査地14）、一九七五年の調査で見つかった、東洞院通に沿った南北の溝一や、その東の土器溜まりなどが一六世紀前半および一五世紀末あたり（調査地13）、関連する施設の遺構と考えられる（図7 曇華院地点西部の溝と土器溜まり）。また二〇〇一年に

図7 曇華院地点西部の溝と土器溜まり（古代学協会第3輯）

おこなわれた調査では、一五世紀末〜一六世紀初め以前と一六世紀末以降の遺物が多く出土している（調査地15）。

(5) 竹田瑞竹（上杉本）三条北室町東

左京三条三坊十二町は、一二世紀初めに白河法皇が御所にした三条西殿跡として知られているが、室町時代には商業地区となり、一四世紀末には祇園社に課役をおさめる綿商人の姿がみられ、一五世紀前半には酒屋や材木屋もあった。「上杉本」のこの地区に描かれているのが、「竹田ずいちく」邸である。『図説上杉本洛中洛外図を見る』と『洛中洛外図大観』によれば、竹田ずいちく（瑞竹）は、後出する竹田法印と共に牛黄丸（円）という薬の製造で有名な医師で、天文年間（一五三二〜一五五五）には、瑞竹定栄（瑞竹）と祐宗三位法印瑞光がいたとする。建物は入母屋造で、三条通には診察を待つ人々に姿がみえる。

左京三条三坊十二町における室町時代の調査結果をみれば（調査地12）、一五世紀末から一六世紀中葉頃と推定される三条大路北側側溝ⅢBが発見され、土師器皿、瓦器釜、瓦器火鉢、備前窯播鉢、古瀬戸灰釉鉢、古瀬戸灰釉卸皿、中国製青磁碗などと共に多量の木製品が出土した。木製品は、巡礼札（図8 左京三条三坊十二町の巡礼札）（「西國卅三所巡礼」「西國卅三所巡礼同行二人」、柿絛、下駄、漆器椀、櫛、柄杓、曲物、甌、木槌、織物と織物用の重りと思われるものおよび木球であり、別に銀製のかんざしの頭部も見つかっている。

また一五世紀後半と推定されるA6土坑二からは、土器・陶磁器と共に多量の漆器関係工具が出土している。その多くは篋であるが、漆濾しの布と思われるものや漆器椀、金蒔絵などもみられる。ほかに鉄製の毛抜きも出土している。

このうち巡礼札については、現在残されている江戸時代より古い紀年銘のある資料と同じ時期にあたり、三十三所巡礼が戦国時代になって庶

民に普及したことと符号するものと考えられている。また多量の漆器関係工具や多様な遺物の出土は、この地区が賑やかな商工業地区だったことを示す。

(6) 頂法寺 (歴博甲本・上杉本) 六角北烏丸東

『六角堂縁起』によれば、聖徳太子の持仏である如意輪観音を安置して

図8 左京三条三坊十二町の巡礼札 (古代学協会第7輯)

一堂を建立したことに始まり、『元亨釈書』は、平安遷都のとき堂宇が街路の中央にあったため五丈ほど北方に移したとする。平安時代中頃から観音信仰が高まり、『百鍊抄』の建久五年(一一九四)六月一三日条には「六角堂上棟也、貴賤拳首結縁云々」とある。また鎌倉時代には比叡山延暦寺の末寺となっていたことがわかれ、親鸞の六角堂百日間参籠との関係が指摘されている。応仁の乱後は、いわゆる町堂の性格をもつ寺となり、天文法華一揆の時には結集地となり、天文六年(一五三七)正月の將軍家拝礼に際しては、下京の町組代表が集まり費用の割当をおこない、また永禄一二年(一五六九)頃の三好三人衆の入京時には、下京の町々が「三好乱妨放火の度ニ」六角堂の鐘をならしている。

今谷氏によれば、上杉本に描かれた瓦葺寄棟造の本堂は、その中にいわゆる六角堂をおさめた鞘堂であり、瓦葺の門や土塀、付属する堂舎の様子および、町衆自治の象徴ともいべき鐘の描写から、町堂として全盛期にあったころの姿とする。

発掘調査によれば(調査地28)、推定三条大路南から約四〇mにあたる調査区の北端から、幅が一・二mで断面がU字形の東西溝SD三三九が見つかった。この溝は平安時代中期末から室町時代前期におよび、六角堂の北端を示す可能性がある。また『寺門高僧記』の三十三所巡礼記事にみられる六角堂の「九間南向」の記述から、六角堂が九間の覆屋の中にあつたと考えられ、出土した安土桃山時代の大型の鬼瓦がそれを示すとされている。

(7) 本能寺 (歴博甲本・上杉本) 六角南西洞院西

応永二二年(一四一五)に、妙本寺(妙顕寺)にいた日隆が油小路高辻と五条坊門の間に建立し当初は本応寺と称された。永享元年(二四二九)、六角室町の豪商小袖屋宗句の帰依を得て内野に本応寺を再建。さらに同五年(一四三三)に六角通以南、四条坊門以北、櫛笥以東、

大宮以西方一町の地を寄進され移建し、この時に寺号を本能寺と改めたという。天文法華の乱に際しては堺の顕本寺に難を逃れ、帰洛後、四条坊門西洞院に再興された。天正一〇年（一五八二）六月二日、明智光秀による本能寺の変で焼失した。

関連する発掘調査のうち四条二坊十五町の調査では、一六世紀末頃に廃絶している濠SD〇四が見つかり、本能寺南限の一部と考えられている。また、平安時代に西洞院大路の中央を南流していた西洞院川は、室町時代において西洞院大路の西半分にひろがっていたが、一六世紀中頃にはその一部を埋めて狭くし、本能寺がその西洞院川を東の濠とし、拡張・整備していったことも明らかとなった（図9 本能寺と西洞院川の変遷）。なお本能寺の寺域については、二〇〇二年におこなわれた旧本能小学校の調査で下京惣構の濠が見つかり（図10 四条二坊十四町SD二〇〇〇（下京惣構濠）断面図）、森幸安の『中京師絵図』によって想定されていた南北二町の規模が修正され、十五町域であることがわかつ

た（調査地23・24）。

（8）竹田法印（上杉本）錦小路北東洞院東

六角堂の南東に描かれている牛黄円で有名な医師の家である。今谷氏によれば、足利義晴の典医のうちの一人となる竹田定桂で、天文四年（二五三五）に法眼になり、天文一九年（二五五〇）に没したとする。『洛中洛外図大観』によれば、南北一町東西二五丈の邸宅で、切妻造板葺の建物と板葺の門が描かれている。

発掘調査によれば（調査地30）、竹田法印邸宅の東を画すると推定される堀（SD三一三）が見つかっている。規模は、幅が二・四m、深さ一・六mで、南北四〇mにわたってのびていた。時期は一六世紀前半に掘られ、一六世紀末に埋められている。

図9 本能寺と西洞院川の変遷
（京都市埋蔵文化財研究所 2007-11）

(9) 萬寿寺 (歴博甲本・上杉本) 五条南東洞院東

萬寿寺は、元は白河天皇の里内裏の一つである六条内裏内にあり、承徳元年(一〇九七)に皇女郁芳門院子内親王の遺宮を仏寺に改め、六条御堂と称したのに始まる。鎌倉時代になり、円爾弁円に帰依して禪宗に改宗し萬寿禪寺と改称し、開堂は弘長元年(一二六一)で、文永九年(一二七二)に供養が修されている。嘉元三年(一三〇五)、崇福寺の南浦紹明が龜山上皇に招かれて上洛し、至徳三年(一三八六)には京都五山に列せられたが、永享六年(一四三四)の洛中大火で類焼し、寛正二年(一四六一)にも開山堂が焼亡するなど被害を受け、大永八年(一五二八)には法塔をとどめるのみであったという。

萬寿寺の伽藍について詳しいことはわかっていないが、今谷明氏は、入

図10 四条二坊十四町 SD2000(下京惣構濠)断面図
(京都市埋蔵文化財研究所 2003-05)

母屋重層の二棟が永享九年(一四三七)に再建立柱のおこなわれた仏殿と法堂と推定し、『洛中洛外図大観』は「十字超閣」と称する二層の三門、「大雄宝殿」と呼ぶ仏殿が大きく描かれておるとし、また「三門の土間が敷瓦を四半敷にするなど、復元して描いたとは考えがたい」としている。

発掘調査は、二〇〇六年に現在の五条通高倉西入る南でおこなわれ

図11 萬寿寺跡Ⅲ期の池跡
(京都市埋蔵文化財研究所 2006-29)

た(調査地43)。調査の結果によれば、調査区の中央から西側にかけてⅣ期にわたる池が見つかった。Ⅰ期の池は調査区のほぼ全域におよぶものだが、洲浜や景石はみつかっていない。Ⅱ期の池は調査区の西側で東西一八m、南北一六・五m、深さは約〇・五五mである。Ⅲ期の池は東西一一m、南北一〇・五mで、池の北岸中央に景石とみられるチャートの石が据えられている。Ⅳ期の池は東西七m、南北一〇・五mである。時期はⅠ・Ⅱ期の池から一五世紀後半、Ⅲ・Ⅳ期の池から一六世紀前半の土器が出土しており、さらにⅡ期の池は火災の後埋められたことがわかっていて(図11 萬寿寺跡Ⅲ期の池跡)。なおⅡ期の火災跡は、永享六年(一四三四)の洛中大火に対応する可能性が指摘されている。

(10) 本圀寺(上杉本) 六条坊門(現在の五条 南堀川西)

本圀寺は、寺伝によれば、日蓮が建長五年(一二五三)に鎌倉松葉ヶ谷に草庵を建て法華堂と号したのに始まる。その後、嘉暦三年(一二三二)には後醍醐天皇の勅願所となり、貞和元年(一三四五)光明天皇の勅により京都の堀川小路西、六条坊門小路(現五条通)南、大宮大路東、七条大路北に一二町の寺地を賜って寺を移したと伝える。

大永七年(一五二七)には、將軍足利義晴が本圀寺に陣をおき、寺域が要害化されていたことが知られ、法華の乱により堺の成就寺に逃れたが、天文一六年(一五四七)以後には以前の地に再建された。なお永祿一一年(一五六八)に織田信長は將軍足利義昭を奉じて入洛した際、義昭は本国寺を館にしている。

発掘調査によれば、鎌倉時代から南北朝にかけての土壙墓が見つかったが、一四世紀後半以降はそれがみられず、土地利用に変化のあったことが指摘されている(調査地40)。また、調査区の南で東西軸のA区溝一と、東で南北軸のB区溝一が見つかった(図12 本圀寺地点遺構配置図)。A区溝一は断面が逆台形で幅は当初四・五mであった

が、後に北側をせばめ三mとしている。出土遺物の時期は、一四世紀代の土器や陶磁器を中心としており、なかでも流水文の青白磁壺や褐釉壺および高麗の象嵌青磁などの輸入陶磁器が目される。なお同様な溝は一九七九～一九八一年の調査でも見つかった(京都市一九八三)、『本圀寺とその寺内を区切る施設と考えられている。B区溝一は、上端幅八m以上、底部幅五mにおよぶもので、埋土から江戸時代の陶磁器が出土しており、本圀寺の東限を示すものと考えられている。

(11) その他の調査事例

左京四条四坊二町(調査地29)の調査では遺構の時期別定量分析がおこなわれ、応仁・文明の乱の頃より、X期とされる一六世紀前半～後半が大きく減少していることがわかった(図13 左京四条四坊二町の時期別遺構数の変遷)。同様な状況は左京四条三坊十二町(調査地26)の調査でもみられ、さらに左京四条三坊四町(調査地25)では、一五世紀から一六世紀にかけて遺物が見られるが、一六世紀代では中頃までが多く、なかでも土坑一〇から出土した鑄造作業に関係する土器器皿転用の坩堝は、一五世紀から一六世紀前半に限定されるという。

左京五条三坊九町(調査地35)は、鎌倉時代後半から南北朝期をピークとして地下蔵や埋蔵倉庫がつくられた商業地区であるが、室町時代についても一五世紀後半から一六世紀初めまでの遺構や遺物が見つかっている。ただし一六世紀中頃の資料は少なく、再び明確な遺構や遺物が確認されるのは一六世紀終わり以降となる。左京五条三坊十六町(調査地39)では、一五世紀末頃のSK一五七〇から、製墨具とも考えられる内面に煤を付着させた土師器の丸底壺が多数見つかった。またこれに続く一六世紀はじめの遺構も見られるが、その後一六世紀末以降まであまり資料がみられない。

左京六条三坊七町は現在の五条衣棚北東にあたり(調査地42)、室町

図12 本圀寺地点遺構配置図(古代学協会第17輯)

時代の遺構は調査区のほぼ全域でみられ、井戸は鎌倉時代の四基から一四基に増える。ただし、大半の時期は一五世紀代で、時代が一六世紀に下がるものは少ない。

このように見ると、下京において応仁・文明の乱がおこった一五世紀からそれにく時期の一六世紀はじめまでは、金属加工に代表される手工業生産や埋甕倉庫にみられる商業活動などが、日常におこなわれており、それほど変化の無い状態が続いていたことになる。しかしこれに対して一六世紀代は遺構や遺物の量が減少するような、なんらかの変化があったことになる。

このような状況を前提に、洛中洛外図に描かれた場所の調査結果をふりかえれば、本能寺跡では一六世紀中頃に西洞院川の改造がおこなわれ、二条殿跡でもやはり一六世紀前半に大きな転換点があり、そのほかの調査地点でも一五

図13 左京四条四坊二町の時期別遺構数の変遷(京都市埋蔵文化財研究所 2008-12)

世紀代の資料の多さにくらべて一六世紀代のおよそ中頃の資料の少なさが目立つ。したがってこの二つの著名な洛中洛外図が描かれた時期は、応仁・文明の乱の時期以上に、下京にとって大きな転換期だったことが考えられるのである。それでは、「歴博甲本」と「上杉本」にみられる下京の相違点は、この状況とどのように関連するのだろうか。

洛中洛外図に表現された戦国時代の京都

遺跡の情報が示す、このような下京の一六世紀代の状況を検討するために、あらためて「歴博甲本」と「上杉本」の下京の表現を比較してみたい。図14・15は、平安京の条坊に二つの洛中洛外図の下京隻に描かれた通りを記したものである。まず最初に、『洛中洛外図大観』をテキストにして、洛中の施設から描かれている範囲を確認する。図14の「歴博甲本」では、南が六条坊門の萬寿寺を限りとして五条の非田寺と因幡堂を描く、西は町通が南北にはしり、その西側の町並みと耕作地の間に、「本能寺」「頂妙寺」「あんせい寺」が記される。本能寺は六角南西洞院西であり、大永二年(一五二二)までが新町鷹司で、以後は高倉中御門とされるため、西洞院の東あたりを西の限りと見てよいだろう。東は東洞院が南北にはしり、その向こうに曇華院や等持寺および内裏などが見えるため、おおむね高倉の西を限りとみられる。北は一条通と報恩寺が限りの象徴だが、室町通は一条通を越えた北の町並みも描かれている。

一方図15の「上杉本」では、南は九条大宮の東寺を限りとし、八条堀川の戒光寺から稲荷の御旅所に上がり、六条坊門堀川の本圀寺を経て萬寿寺にいたる。西は西洞院通と油小路通が描かれ、その西に中堂寺が記されるが、この中堂寺が現在の中堂寺前町につながるならば、五条大宮で東寺と同じ西のラインを構成する。ただし油小路通以西の様子はいずれも断片的であるため、実質的な西の限りとしては、堀川

図15 上杉本に描かれた主な通り

「上杉本」は平安京以来の条坊にしたがっている。さらに街路の密集度についてみれば、「歴博甲本」は一条から五条までを平均的に描いているのに対して、「上杉本」は三条坊門から五条までの範囲とそれ以外の場所の密集度に差がみられる。

その結果、「歴博甲本」は五条以北が連続した都市であり、さらにそれが一条以北の上京までつながっている様子を見せることになり、一方これに対して「上杉本」は五条から三条坊門までの範囲が、それ以外の地区と区別された特別の空間

図14 歴博甲本に描かれた主な通り

までと見える。東は東洞院通が南北にはしり、その先に曇華院・等持寺・内裏が見えるため「歴博甲本」と同様に高倉通が限りとされよう。北の通りは正親町通が限りで、一条通は上京隻に描かれている。

以上のような「歴博甲本」と「上杉本」の下京隻に描かれた洛中の範囲をふまえ、その記された通りを比べると、そこに大きな違いのあることがわかる。

最も大きな違いが描かれた範囲であることは言うまでもないが、それ以上に異なるのが、下京中心部の風景を構成する街区の表現である。「歴博甲本」は南北二町をひとつの区画にしているのに対して、

「上杉本」は平安京以来の条坊にしたがっている。さらに街路の密集度についてみれば、「歴博甲本」は一条から五条までを平均的に描いているのに対して、「上杉本」は三条坊門から五条までの範囲とそれ以外の場所の密集度に差がみられる。

その結果、「歴博甲本」は五条以北が連続した都市であり、さらにそれが一条以北の上京までつながっている様子を見せることになり、一方これに対して「上杉本」は五条から三条坊門までの範囲が、それ以外の地区と区別された特別の空間

となり、そのため一条以北の上京とも分離した姿を見せることになって
いる。言い方を変えれば、「歴博甲本」の表現は、下京の五条通から上
京の上立売通まで町並みが南北に連なるひとつにまとまった京都であ
り、「上杉本」は上京と下京がそれぞれ独立した京都として描かれてい
ると読めるのである。この違いは何を意味するのであろうか。

その点で想起されるのが、このような「歴博甲本」の街区表現と室町
時代の京都の姿との類似性である。平安時代中期におこった左京三条以
北への邸宅集中以後、左京を中心に大きくその姿を変えていった京都は、
鎌倉時代には左京の七条周辺と一条以北の二つの核を中心に、南は八条
から北は後の上立売まで続く南北に長い都市になった。しかし鎌倉時代
の終わり頃には、七条周辺の商業地区は衰退し、都市としての京都の南
限はおおむね六条まで北上する。その結果室町時代の京都は、およそ北
が後の上立売で南が六条坊門あたりまでの範囲に集約された都市となっ
ていった。「歴博甲本」の街路表現が示す京都の姿は、まさにこの室町
時代の京都の姿なのである。

応仁・文明の乱は京都に大きな被害をもたらし、その結果、復興後の
京都は、上京と下京のコンパクトな二つの中心街から構成される都市に
なつたと考えられている。けれども、少なくとも下京においては、応仁・
文明の乱の時期に、それほど大きな被害を受けた遺跡の痕跡は見られず、
むしろ一五世紀代と一六世紀初めの遺跡情報には、連続性が認められた。
一六世紀はじめ頃の姿を描いた「歴博甲本」の街区表現が、応仁・文明
の乱以前の室町時代の京都の姿と類似しているのは、吉村亨氏が指摘し
ているように「吉村一九九四」、応仁・文明の乱が下京におよぼした影響
の少なさによるものと考えられよう。

これに対して「上杉本」の下京の街区表現は、室町時代の京都の姿と大
きく異なっている。しかも遺跡情報も一六世紀の中頃に転換点があること
を示している。それでは「上杉本」の下京が、これほどまでに違った街区表現

になった理由は、一六世紀代の歴史事象の中に求められないのだろうか。

横井清氏に学べば「横井一九六八」、京都にとつての一六世紀前半は、
応仁・文明の乱の時期に勝るとも劣らないような困難な時期であった。
災害の記事をあたれば、明応九年（一五〇〇）には上京の南北は柳原か
ら近衛・土御門まで、東西は烏丸から小川までの二万戸が大火に遭い、
永正七年（一五一〇）には大地震が襲っている。大永二年（一五二二）
には麻疹の流行で多くの犠牲がでて、連歌師宗長は、大永年間に書かれ
た『宗長日記』の中で、「京を見渡し侍れば、上下の家昔の十が一もなし。
只民屋の耕作業の体、大裏は五月の麦の中、あさましとも申にもあまり
有るべし」と嘆いている。さらに天文九年（一五四〇）の春には大きな
飢饉があり、「上京、下京の間、春夏中、毎日六十人ばかりの死者これ
を捨つ」という状況が秋まで続いたという（『嚴助往年記』）。

そんな状況の中、洛中では土一揆の蜂起が続き、天文元年（一五三二）
からは法華一揆が、天文五年（一五三六）には延暦寺宗徒が法華宗徒を
攻撃した天文法華の乱がおこり、天文一八年（一五四九）には、摂津江
口の戦いによって、きわめて不安定な京都政権による、信長入洛までの
畿内戦国史後期が幕を開ける（熱田一九八二）。

このような京都の一六世紀の状況を、特徴的な遺構から検討した研究
が山本雅和氏の「中世京都の堀について」である（山本一九九六）。氏は
その中で、京都市内で見つかる鎌倉時代から江戸時代初期までの様々な
堀の特徴を整理分析しているが、小堀に関係して注目されるのが「洛中
の堀B型式」である。その特徴は、規模が大きく、内側に土塁も備えた
防御的な性格の高いもので、ほかの堀と異なり、条坊制の方向を踏襲せ
ずに町組全体を囲う堀であることなどであるが、最も重要な点は、その
掘削時期が、応仁・文明の乱の時期ではなく一六世紀だということであ
る。

一六世紀前半の京都は、たてつづけにおこる災害と政治的な混乱の

一方で、町衆の結束が高まった時期でもあった。仁木宏氏によれば、一五四〇年前後には町共同体が確立し、個々の町を基礎とする上京中・下京中が成立すると考えられている〔仁木二〇一〇〕。先の「洛中の堀B型式」が一六世紀に登場する背景には、このような町共同体との関係が推定され、それをふまえれば、「歴博甲本」と異なった「上杉本」の街区表現は、それによってうみだされた下京中心部の姿が前提になっていたと考えられるのである。

戦国時代の京都の姿を描いた「歴博甲本」と「上杉本」は、基本的に、先に完成していた「歴博甲本」を基準に系統的な関係で説明することが妥当である。ただし都市図としての視点を両者に慎重に加えることで、これまであまり検討されることのなかった、応仁・文明の乱以後で織田信長が入洛するまでの京都の社会を検討するための、様々な情報が創出される可能性がある。

引用・参考文献

- 鋤柄俊夫 二〇〇八 『中世京都の軌跡』雄山閣
林屋辰三郎 一九八四 『洛中洛外図の構想（洛中洛外屏風の世界）』『文学』五二（三）
今谷明 一九八八 『京都・一五四七』平凡社
黒田日出男 一九九六 『謎解き洛中洛外図』岩波新書
瀬田勝哉 一九九四 『公方の構想』洛中洛外の群像』平凡社
水藤真 一九九四 『絵画・木札・石造物に中世を読む』吉川弘文館
黒田絃一郎 一九九六 『洛中洛外屏風』についての覚書』中世都市京都の研究』校倉書房
黒田絃一郎 一九八七 a 『洛中洛外屏風』についての覚え書き』『日本史研究』二九七
黒田絃一郎 一九八七 b 『都市図の機能と風景』上杉本洛中洛外屏風』『絵図にみる
莊園の風景』東京大学出版会
小島道裕 二〇〇九 『描かれた戦国の京都』洛中洛外図屏風を読む』吉川弘文館
石田尚豊・内藤昌・森谷尅監修 一九八七 『洛中洛外図大観』小学館
吉川弘文館 二〇一〇 『国史大辞典WEB』
平凡社 二〇〇六 『JIK版日本歴史地名大系』

- 小澤弘・川嶋将生 一九九四 『図説上杉本洛中洛外図を見る』河出書房新社
吉村亨 一九九四 『応仁・文明の災』京都歴史アトラス』中央公論社
横井清 一九六八 『第四節 町衆の生活』京都の歴史』3学藝書林
熱田公編 一九八一 『鎌倉・室町・戦国』(年表日本歴史5)筑摩書房
山本雅和 一九九六 『中世京都の堀について』研究紀要』第2号 京都市埋蔵文化財研究
仁木宏 二〇一〇 『京都の都市共同体と権力』思文閣出版
京都市 一九八三 『史料京都の歴史』第二卷(考古)平凡社

(同志社大学文化情報学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一二年一〇月二六日受付、二〇一三年一月二五日審査終了)